

与信判断の継承

スコアリングの先に残る「審査の目」を、
引き出し・構造化し、次の審査者へ

*Inheriting Credit Judgment:
Eliciting, Structuring, and Passing On the "Underwriter's Eye"
that Scoring Cannot Capture*

PUBLISHED BY

taiziii Research

Judgment Intelligence Desk

本書の位置付け

与信DXの主流と、その先に残るもの

本書は、企業与信・審査のDXを扱う。与信DXの主流は「データを増やし、スコアリングを賢くする」ことにある。信用調査会社の評点、財務スコアリング、AIによる与信モニタリング——これらは与信業務の土台として有効であり、本書もその価値を否定しない。

だが、現場のベテランが日々おこなっている判断の核は、どのスコアリングモデルにも実装されていない。同じ財務諸表に、あるベテランはOKを出し、別のベテランはNGを出す。その差——判断の理由（WHY）は、審査担当の頭の中であって、スコアには絶対に載らない。本書が扱うのは、この「審査の目」を、どう引き出し、構造化し、次の審査者へ渡すかという問いである。

本書はリース・融資審査の現場を題材にしつつ、与信判断一般に通じる「判断知の継承」を主題とする。スコアリング技術の実装詳細や、個別の信用調査サービスの比較は、本書の範囲としない。各号は単独で読めるように書いており、他号の参照を前提としない。

目次

01 なぜいま「審査の目」を問うのか

現場の描写と、業務フロー図に映らないもの

02 標準アプローチとその限界

スコアリングは「構造化データの中」で完結する

03 残るのは「判断知」の層

管理する知識（What）と、継承する判断（How）を分ける

04 判断知が消えると何が起きるか

「書類は完璧だが実態が嘘」の案件を、誰も止められない

05 判断知をどう継承するか

AIは審査しない — 引き出し・構造化・問いかける

06 判断知の実例（匿名化）

現地の佇まいと、業種に照らした不自然さ

07 導入ロードマップとつまずき

WHATの棚卸しから、WHYの構造化へ

エグゼクティブ・サマリー

1

同じ財務に、あるベテランはOK、別のベテランはNGを出す

その差=WHYは審査担当の頭の中にあり、スコアリングモデルには載っていない。「データを増やしてスコアを賢くする」だけでは、この判断は継承できない。

2

与信審査は定量・定性評価の両面が重要だが、多くの標準アプローチは定量面のDXに留まりがちで、現場の“勘”を捉え切れていない

信用調査会社の評点・財務スコア・AIモニタリングは、いずれも申告・財務・履歴という構造化データ（定量面）の内側で動く。現地の佇まい・名義の時系列・業種特有の含みといった定性面は、その外にある。

3

残るのは「判断知」の層 = How to decide

何が危険信号かを決めているのはベテランの判断であり、そこが言語化されない限り、どのモデルに乗り換えても同じ穴が残る。問題はスコアの精度ではなく、審査の目の継承である。

4

これが消えると、「書類は完璧だが実態が嘘」の案件を止められない

ベテランは毎回やっているが「当たり前」だと思っていて、聞かないと出てこない（省略バイアス）。だから判断知は自然には継承されず、退職とともに失われる。

5

打ち手は、判断知の引き出し・構造化・継承

AIは審査しない。判断の材料を整え、問いかけ、品質を保証する側に置く。ゴールは判断の置換ではなく、判断が働く前提を整えて人の打率を上げることにある。

01 なぜいま「審査の目」を問うのか

現場の描写と、業務フロー図に映らないもの

KEY FINDINGS

- 審査の観点（何を見るか＝WHAT）は整理できる。だが「同じ財務でも、なぜ通す／見送るか」（WHY）は、口頭で聞いても出てこない。
- 本人が「当たり前」として意識していないため、判断は言語化されない（省略バイアス）。判断知は、退職とともに失われていく。
- 業務フロー図（誰が何をするか）はある。だが、判断の理由（WHY）が溜まる場所が、システムにも書類にもどこにもない。
- 企業倒産は2年連続で1万件を超え、人手不足を理由とする倒産も過去最多の水準にある。審査の現場でも、判断知の継承は待ったなしの課題になっている。

ある金融機関のリース審査部門を題材に考える。案件は、**申込 → 財務分析 → 事業性評価 → 与信判断 → 契約**、という流れで捌かれていく。一見すると、よく整理された手続きである。

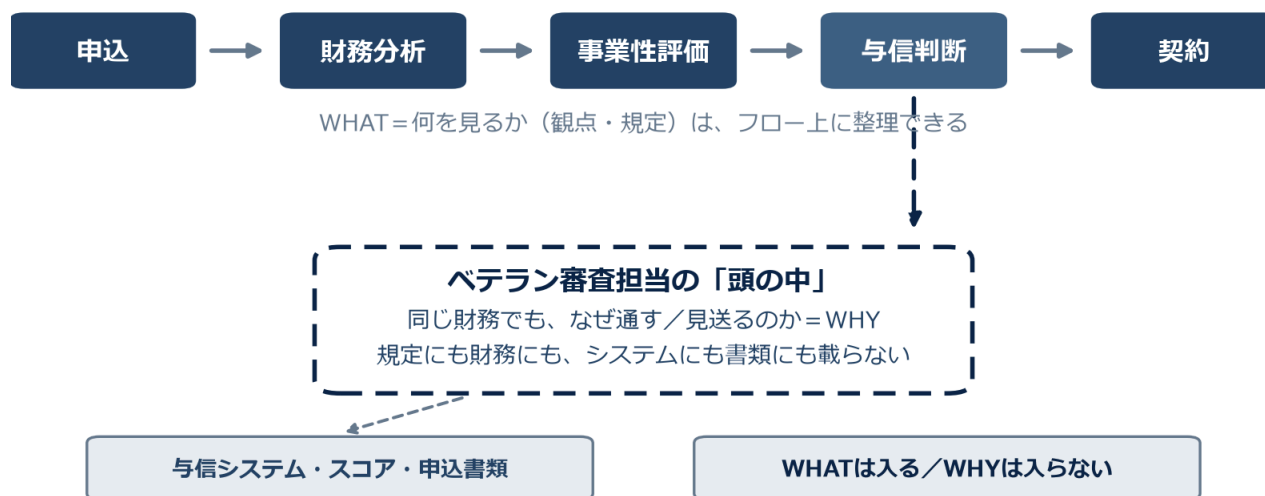
審査の観点そのもの——何を見るか——も、きちんと言葉になっている。財務健全性、リース物件の価値、事業継続性、支払履歴、業界動向。新人にも「この五つを見なさい」と教えられる。ここまでは形式知だ。

問題はその先にある。「同じ財務でも、なぜこの案件は通し、あの案件は見送るのか」という判断の理由は、本人に口頭で聞いても出てこない。ベテランは決して隠しているわけではない。**本人が"当たり前"として意識していないから、言葉にならないのだ**。ここがこのドメインの核心であり、最大の難所である。

業務フロー図はある。だが「判断の溜まり場」が見えない

多くの審査部門には、立派な業務フロー図がある。誰が、どの順で、何をするか。だが、その図と実態を照らし合わせると、奇妙なことに気づく。最も重要な情報——「なぜそう判断したか」という判断の理由——が、どこにも溜まっていない。与信システムにも、申込書類にも、スコアにも入らない。それは、ベテランの頭の中にだけある。図には決して現れない**"判断の溜まり場"**である。

業務フロー図はある。だが「判断の理由（WHY）」は、どこにも溜まっていない



出所：ある金融機関のリース審査部門の業務フローに基づき taiziii Research 作成

なぜ、いまなのか

判断知の継承は以前から課題だったが、いま切実さが増している。東京商工リサーチによれば、企業倒産は2年連続で1万件を超え、人手不足を理由とする倒産も過去最多の水準にある。与信を受ける側だけの話ではない。審査する側も、ベテランの高齢化と退職が進む。判断知は、それを持つ人がいなくなれば、そのまま失われる。「観点は整理できているから大丈夫」という安心は、ここで崩れる。

注意 — WHATの整備と、WHYの継承は別物

「観点が整理できている＝判断が継承できている」ではない。何を見るか（WHAT）はマニュアル化できる。だが、なぜそう判断するか（WHY）は、別の継承を要する。本書はこの後者だけを扱う。

02 標準アプローチとその限界

スコアリングは「構造化データの中」で完結する

KEY FINDINGS

- 信用調査会社の評点、財務スコアリング・与信限度額モデル、AI与信モニタリングは、与信DXの標準アプローチである。
- これらはいずれも、申告・財務・履歴という「構造化データ」の中で完結する。現地・時系列・業種の含みは、その外にある。
- その構造化データ自体も万全ではない。財務諸表は「作れる」し、黒字でも倒産する——倒産企業のおよそ3割は直近決算が黒字だった。
- 問題は「スコアが甘い／古い」ことではなく、「審査の目が継承されていない」ことにある。

本章は、読者の多くが一度は導入したであろう標準アプローチを、まず具体的に挙げる。そのうえで、なぜそれだけでは危ない案件が止まらないのかを言い当てる。

標準アプローチ — 三つの定石

第一に、**信用調査会社の評点**。業歴・財務・規模などを総合した点数で、与信管理のデファクト標準として広く使われる。第二に、**財務スコアリングと与信限度額モデル**。決算データからデフォルト確率や限度額を算出し、属人的な勘ではなく定量的に枠を決める。第三に、**AIによる与信モニタリング**。ニュースや口コミ、支払遅延、反社・ネガティブ情報を自動で検知し、変化をアラートする。いずれも有効な施策であり、入れない理由はない。

限界① — すべては「構造化データの中」で完結する

だが、これらに共通する制約がある。**いずれも、申告・財務・履歴という構造化データの内側でしか動けない**。データとして入力された範囲が、判断の地平のすべてになる。現地に行けば一目でわかる佇まい、代表者名義の不自然な時系列、業種特有の「含み」——これらは構造化データの外にあり、スコアの視界には入らない。

スコアリングは「構造化データの中」で完結する。判断知はその外にある



データを増やしても、何が危険信号かを決めているのは右側の判断。そこが言語化されない限り、どのモデルでも同じ穴が残る

出所：taiziii Research 作成

限界② — その構造化データ自体も、万全ではない

さらに踏み込むと、頼みの構造化データ自体に穴がある。**財務諸表は「作れる」**。粉飾は長期化・巧妙化し、金融機関ごとに異なる決算書が作られることもある。そして、**黒字でも倒産する**。東京商工リサーチの分析では、倒産企業のおよそ3割は直近決算が黒字だった。自己資本比率が30%以上ありながら倒産した企業も存在する。財務の見かけが整っていることは、安全の証明にはならない。

問題は「スコアが甘い／古い」ことではない — 財務が整っていても危険は残る

黒字でも倒産する	倒産企業のおよそ3割は直近決算が黒字。 損益だけでは危険度を測れない
自己資本が厚くても倒産する	自己資本比率30%以上で倒産した企業も存在する。 財務の見かけは安全に映る
財務諸表は「作れる」	粉飾は長期化・巧妙化し、金融機関ごとに 異なる決算書が作られることもある

だから残るのは「審査の目」=何を危険信号と見るかの判断。スコアの乗り換えでは埋まらない

出所：東京商工リサーチ「倒産企業の財務データ分析」「全国企業倒産状況」等に基づき taiziii Research 作成

だから — 問題はスコアではなく、審査の目の継承

ここで先回りしておきたい。「与信DXはもう入れた。それでも危ない案件は止まらない」という読者へ。その原因は、スコアが甘いからでも、データが古いからでもない。**データを増やしても、何を危険信号と見るかを決めているのはベテランの判断であり、そこが言語化されない限り、どのモデルに乗り換えても同じ穴が残る。**つまり——これはスコアリングの問題ではなく、審査の目が継承されていない問題なのだ。ここを取り違えると、「次はもっと賢いスコアを」と投資を続けながら、肝心の穴は開いたままになる。

スコアの高度化 ≠ 判断の継承

スコアリングは土台として要る。だが、それを賢くすることと、ベテランの審査の目を次へ渡すことは、まったく別の作業である。

03 残るのは「判断知」の層

管理する知識（What）と、継承する判断（How）を分ける

KEY FINDINGS

- 知識（What to do）は観点・規定・マニュアルに落ち、ツールとデータで継承できる。
- 判断（How to decide）は「なぜそう判断するか」。図にもデータにもマニュアルにも載らず、人に張り付く。
- 知識粒度の上の層——ヒューリスティックとパターン認識——は、マニュアル化が最も難しく、退職とともに失われる。
- 金融庁も、粉飾予兆の検知の端緒は、定量面がおおよそ半分、残りは定性・その他と整理している。

判断知を継承するには、まず二つを分けて捉える必要がある。混同したまま「DXで継承しよう」とすると、打ち手を誤る。

知識（What）と、判断（How）

知識=What to do（何を見るか）は、手順・標準・マニュアルに落ちる。「財務健全性・物件価値・事業継続性・支払履歴・業界動向の五つを見る」という観点は、まさにこれだ。ツールとデータで継承できる。一方、**判断=How to decide（なぜそう判断するか）**は、「同じ財務でも、なぜ通す／見送るか」という決め方そのものである。図にもデータにもマニュアルにも載らず、人に張り付く。ここが本書の射程＝判断知である。

「管理する知識（What）」と「継承する判断（How）」を分ける

知識 = What to do（何を見るか）

判断 = How to decide（なぜそう判断するか）

観点・規定・マニュアルに落ちる／ツールとデータで継承できる

図にもデータにもマニュアルにも載らない／人に張り付く

知識粒度 — 上の層ほどマニュアル化が難しく、退職とともに失われる

⑤ 直感・メタ判断	違和感、総合的な見極め	失われる層
④ パターン認識	業種×条件×時期の組合せ	失われる層
③ ヒューリスティック	経験則・勘どころ	失われる層
② 手順・規定	チェック項目、与信規程	
① 事実・データ	決算値、登記、履歴	

与信の2例（地図での実態確認・名義変更の読み）は③④の層。金融庁も粉飾予兆の端緒の半分は定量、残り半分は定性・その他と整理している

出所：金融庁「粉飾等予兆管理態勢の高度化」に関する整理等に基づき taiziii Research 作成

知識粒度 — どこから継承が難しくなるか

判断知を「粒度」で見ると、継承の難所がはっきりする。①事実・データ、②手順・規定、まではマニュアル化できる。だが③ヒューリスティック（経験則・勘どころ）、④パターン認識（業種×条件×時期といった組合せの読み）、⑤直感・メタ判断に進むと、急に言葉にしづらくなる。**退職とともに失われるのは、この上の層だ。**本書が後半で示す与信の実例二件は、いずれもこの③④の層にある——だからこそ、スコアにもマニュアルにも載らない。

■ 当局も認める — 違和感を読む人材が要る

これは現場の感覚論ではない。金融庁が2025年に公表した、粉飾等の予兆管理に関するモニタリングレポートでは、予兆検知の端緒のうち**定量面がおよそ半分、定性面とその他（外部情報等）が残り半分**を占めると整理されている。そして当局自身が、「異常や違和感を察知できる、情報感度の高い人材の育成」を課題に挙げている。数字を読むだけでは半分しか拾えない——これは、判断知（③④の層）の重要性を、制度の側から認めたものと言える。

分けて捉える — What と How

管理する知識（What）と、継承する判断（How）。DXの対象がどちらなのかで、打ち手はまったく変わる。スコアリングはWhatの自動化に強い。だが本書が問うのは、Howの継承である。

04 判断知が消えると何が起きるか

「書類は完璧だが実態が嘘」の案件を、誰も止められない

KEY FINDINGS

- 判断知が消えると、書類上は完璧でも実態が伴わない案件を、誰も止められなくなる。
- 省略バイアス——ベテランは毎回やっているが「当たり前」だと思い、聞かないと出てこない——が、継承を阻む。
- 「数字は揃っているのに、業種に照らすと違和感がある」という判断が機能しなくなる。
- 事業継続性（後継者・廃業リスク）は財務に表れにくく、延滞ゼロでも危ういパターンがある。

判断知が継承されないと、具体的に何が起きるのか。損失は、静かに、しかし確実に積み上がる。

判断知が消えると、「書類は完璧だが実態が嘘」の案件を誰も止められない



ベテランは毎回やっている。だが本人は「当たり前」だと思っていて、聞かないと出てこない

たとえば — 数字は揃っているのに、違和感だけが止める

「多店舗展開の業種に照らして一店舗あたりの現預金が過大」という違和感から粉飾が判明した例がある。

この「照らして」が判断知。これが無ければ、各数値は整って見えるだけになる。

出所：金融庁「金融機関における粉飾等予兆管理態勢の高度化に向けたモニタリングレポート」等に基づき taiziii Research 作成

最大の損失 — 「止める理由を持つ人」がいなくなる

最も重い損失は、「書類上は完璧だが、実態が嘘」の案件を止められなくなることだ。スコアがどれだけ精緻でも、止める理由を言語化できる人がいなければ、案件は通ってしまう。判断知とは、まさにこの「止める理由」を生み出す力である。

なぜ自然には継承されないのか — 省略バイアス

ここで厄介なのが省略バイアスだ。ベテランは、危険信号を読む判断を毎回やっている。だが本人は「当たり前」だと思っていて、意識すらしていない。だから、こちらから聞かなければ出てこないし、マニユ

アルにも書かれない。「ベテランがいるうちは回るが、いなくなった瞬間に穴が開く」のは、この省略バイアスのためである。放っておいて自然に伝わるものではない。

数字は揃っているのに、違和感だけが止める

判断知がどう働くかを、当局の例で示す。金融庁のレポートには、**多店舗展開している業種に照らして「一店舗あたりの現預金が過大」**だという違和感から、調査の結果、粉飾が判明したケースが挙げられている。この"業種に照らして"という補助線こそが判断知だ。個々の数値は、単体で見れば整っている。業種の相場観と引き比べて初めて、違和感が立ち上がる。この補助線を持つ人がいなければ、数字はただ整って見えるだけになる。

財務に表れにくい — 事業継続性という落とし穴

もう一つ、財務に表れにくいのが事業継続性である。後継者不在や廃業のリスクは、決算書の数値には出てこない。帝国データバンクによれば、後継者不在率は改善傾向にあるものの、**小規模企業ほど高い**。延滞ゼロで財務も健全に見える先が、代表者の高齢化と後継者不在によって数年内に止まる——というパターンは現実にある。これも、数字の外側を読む判断知の領域だ。

判断知の消失は、「止められない案件」を生む

スコアが精緻でも、止める理由を持つ人がいなければ、案件は止まらない。失われるのは情報ではなく、危険を危険と見抜く目そのものである。

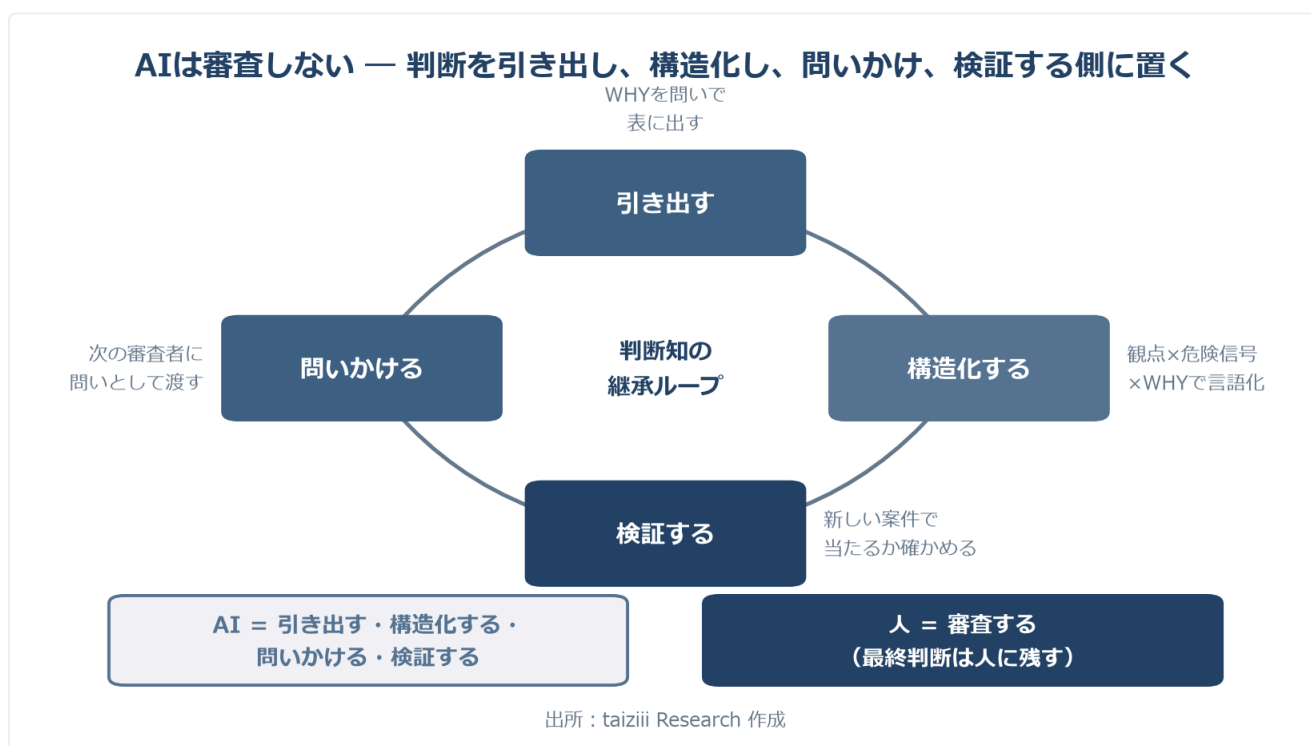
05 判断知をどう継承するか

AIは審査しない — 引き出し・構造化・問いかける

KEY FINDINGS

- AIは審査しない。判断を引き出し・構造化し・問いかけ・検証する側に置く。
- 省略バイアスを越えるには、本人が「当たり前」としている判断を、具体的な対の案件を示して問いで表に出す。
- 観点×危険信号×WHYの形で言語化する。複数ベテランの判断は統合・平均せず、帰属を残して並列に保つ。
- ゴールは判断の置換ではない。判断が働く前提（情報の網羅・鮮度・共有）を整え、人の打率を上げる。

では、どう継承するか。ここで本書の立場を改めて述べる。**AIは審査しない**。AIに正解を出させ、人がそれに従うのではない。AIは、ベテランの判断を引き出し・構造化し・問いかけ・検証する側に置く。審査するのは、最後まで人である。



引き出す — 省略バイアスを越える唯一の道は「問い」

抽象的に「どう判断していますか」と聞いても、省略バイアスのため何も出てこない。有効なのは、**具体的な対の案件を示すこと**だ。「同じような財務で、こちらは通し、こちらは見送った。その差は何ですか」——対比を突きつけられて初めて、本人が言語化していなかった判断の理由が表に出てくる。

｜ 構造化する — 平均しない、帰属を残す

引き出したWHYは、**観点 × 危険信号 × WHY**の形で言語化する。このとき、決定的に重要な原則がある。**複数ベテランの判断を、統合・平均してはならない**。「Aさんはここで弾く／Bさんは通す」を、それぞれの帰属を残して並列に保つ。平均すると、それぞれの判断の筋が死に、当たり障りのない基準だけが残る。判断知の価値は、その人固有の読みにこそある。

｜ 問いかける・検証する — ループを回す

構造化した判断知は、次の審査者に「答え」としてではなく「問い」として渡す。「この業種で、この時期に名義が変わっていたら、あなたは何を確認しますか」。問いの形にすることで、受け手は自分の判断として身につけていく。そして新しい案件で当たるかを検証し、ループを回す。引き出す → 構造化する → 問いかける → 検証する、の循環である。

｜ ただし — 完全な置換は、できない

これは暗黙知を形式知に変える営みである。だが正直に言えば、**完全な置換は不可能だ**。職人技と同じく、判断の核心は最後まで人に残る。だからこそ、AIに判断を肩代わりさせようとするのは筋が悪い。AIがすべきは、判断が働く前提——情報の網羅、鮮度、共有——を整え、人の打率を上げることである。ここを取り違えないことが、与信DXの成否を分ける。

役割分担を間違えない

AIは、引き出す・構造化する・問いかける・検証する。審査するのは、人である。この線引きを崩した瞬間に、判断の品質保証は成り立たなくなる。

06 判断知の実例（匿名化）

現地の佇まいと、業種に照らした不自然さ

KEY FINDINGS

- 例1：財務諸表は作れるが、店構え・看板・立地は偽装しにくい。申告と現地の佇まいの食い違いを、危険信号として読む。
- 例2：業種の実態と整合しない代表者の名義変更＋その時期を、信用の「洗い替え」の疑いとして読む。
- いずれもスコアリングには載らない判断であり、知識粒度ではヒューリスティックとパターン認識の層にある。
- 規定の「代表者属性チェック」では拾えない、業種×名義×時期の組合せから来るパターン認識である。

ここまでの議論を、匿名化した実例で示す。いずれも「ある金融機関のリース審査部門」のベテランの判断である。

判断知の実例 — 「数字が嘘をつけない部分」と「業種に照らした不自然さ」

例1：現地の佇まいで実態を確認する（観点：事業継続性／実態確認）



WHY：財務諸表は作れるが、店構え・看板・立地は偽装しにくい。申告と現地が食い違えば危険信号（倉庫がガラガラ／登記が雑居ビルの一室 等）

例2：業種と整合しない名義変更を、危険信号として読む（観点：名義の異常検知）



WHY：トラブル後に表へ立てない前代表が、名義だけ挿げ替えて信用を洗い替える一時措置の疑い。事業実態は前のまま、信用情報だけリセットされている可能性

※特定の属性を理由にしない。「業種の実態と整合しない名義変更＋その時期」という構造として、断定ではなく危険信号の一つとして扱う

出所：ある金融機関のリース審査部門の判断例（匿名化）に基づき taiziii Research 作成

例1 — 現地の佇まいで、実態を確認する

観点	事業継続性／実態確認（書類の外）
状況	申告された事業規模・業歴・所在地
ベテランの判断	無料の地図ツール（地図・ストリートビュー）で、現地の外装・看板・建物の手入れ具合まで見る
決め手（WHY）	財務諸表は作れるが、店構え・看板・立地の佇まいは偽装しにくい。申告（規

	模・業歴）と現地の実態が食い違えば危険信号（倉庫だと聞いていたのにガラガラ／本社所在地が雑居ビルの一室、など）
新人の見落とし	書類が揃っていると、現地を見ない
知識粒度	ヒューリスティック（＋パターン認識）

ここで強調したいのは、これを「AIで現地写真を解析する」話に流さないことだ。重要なのは、**"何を見ているか"**——**実態と申告の乖離という判断の構造**であって、画像認識の精度ではない。無料の地図ツールで、数字が嘘をつけない部分を取りに行く。これは与信スコアには絶対に入らない判断である。

例2 — 業種と整合しない名義変更を、危険信号として読む

観点	事業継続性／名義の異常検知
状況	ある業種で、代表者が（多くは近親者等の）別名義になっている
ベテランの判断	要注意フラグを立てる。名義変更の時期と、変更前後で事業の連続性があるかを確認する
決め手（WHY）	経済的トラブルの後に「表に立てなくなった前代表」が、名義だけ挿げ替えて信用を洗い替える一時措置ではないか、という疑い。事業実態は前のまま、信用情報だけがリセットされている可能性がある
新人の見落とし	代表者の属性を、額面どおりに受け取る
知識粒度	パターン認識（業種 × 名義変更 × 時期 の組合せ）

この例は、書き方に注意が要る。**特定の属性（誰の名義か）それ自体を理由にしてはならない**。読むべきは「業種の実態と整合しない名義変更＋その時期」という構造であり、断定ではなく、あくまで危険信号の一つとして扱う。規定の代表者属性チェックでは、この組合せは拾えない。だからこそ、これは継承すべき判断知なのである。

継続収集中

最も濃いWHYが埋まる枠 — 「規定を超えた判断」

規定上はOK／NGが明確でも、ベテランが逆に判断した案件——財務は良いのに事業継続性で引っかかった、延滞ゼロでも警戒した——には、最も濃い判断の理由が埋まっている。これらはWHYヒアリングを通じて継続的に収集し、本シリーズで順次、構造化して示していく。

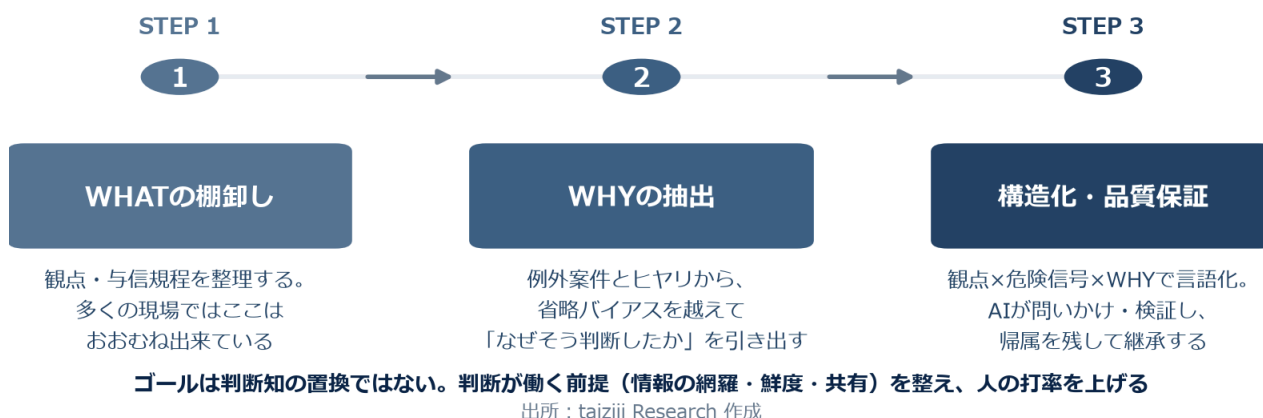
07 導入ロードマップとつまずき

WHATの棚卸しから、WHYの構造化へ

KEY FINDINGS

- STEP1：WHATの棚卸し。観点・与信規程を整理する。多くの現場では、ここはおおむね出来ている。
- STEP2：WHYの抽出。例外案件とヒヤリから、省略バイアスを越えて「なぜそう判断したか」を引き出す。
- STEP3：構造化・品質保証。観点×危険信号×WHYで言語化し、AIの問いかけ・検証で、帰属を残して継承する。
- つまずきは、統合・平均の誘惑／AIに審査させる誤り／属性での断定／顧客情報の取扱い。

導入ロードマップ — WHATの棚卸しから、WHYの抽出・構造化へ



三段階で進める

STEP1 — WHATの棚卸し。多くの審査部門では、観点（何を見るか）はおおむね整理できている。まずはそれを明示的に棚卸しし、どこまでが形式知かを確認する。ここは出発点であって、目的地ではない。

STEP2 — WHYの抽出。ここが本丸である。例外案件（規定を超えた判断）とヒヤリ・ハットを起点に、「なぜそう判断したか」を問いで引き出す。省略バイアスがあるため、抽象的に問うても出てこない。具体的な対の案件で掘るのが要諦だ。

STEP3 — 構造化・品質保証。引き出したWHYを、観点×危険信号×WHYで言語化し、帰属を残して並列に保つ。AIが問いかけ・検証する側に回り、次の審査者へ問いとして渡す。これを継続的に回す。

つまずきポイント — 四つの落とし穴

- ① **統合・平均の誘惑**。複数ベテランの判断を一つに均すと、それぞれの筋が死ぬ。帰属を残して並列に保つ。
- ② **AIに審査させる誤り**。AIは引き出す・構造化する・問いかける・検証する側。審査するのは人である。
- ③ **属性での断定**。例2のような判断は、属性そのものを理由にしない。構造として、危険信号の一つとして扱う。
- ④ **顧客情報の取扱い**。顧客名・未公開の与信枠・取引額・焦げ付き額は扱わない。匿名化を前提に、判断の構造だけを継承する。

まとめ — 与信DXの、最後の一里塚

本書の主張を一文にすれば、こうなる。**与信判断の継承は、"より多くのデータで賢くしたスコアリング"ではなく、ベテランの審査の目＝言語化されない判断の理由（WHY）を引き出し・構造化し・次の審査者への材料として渡す仕組みで決まる。**スコアリングは土台として要る。だが、その上に残る「審査の目」をどう継承するかが、与信DXの最後の——そして最も価値のある——一里塚である。

判断知の継承に取り組む — SkillRelay

taiziii は、判断知の継承を主題に、製造業の現場（切削加工・維持設計）から与信・審査まで、業種をまたいで「判断のWHY」を引き出し・構造化する取り組みを **SkillRelay** として進めている。AIは審査しない——引き出し・構造化し・問いかけ・検証する側に置く、という立場を一貫させている。

与信・審査における判断知の棚卸し、WHYヒアリングの設計、判断の品質保証の具体については、SkillRelay のページ <https://taiziii.com/skillrelay/> をご覧ください。